土を考える会

胡坐をかかず前進

〝従業員ファースト〟の職場

「中四国土を考える会」勝部会長に聞く

「土を考える会」は、農業に対するほ場づくりや基本技術、機械化をテーマとして先進的農家が情報交換を行い、手弁当で研鑽を重ねる革新的な農業経営者組織。１９７８年の「北海道土を考える会」の創立から45年、本州で各地区に設立された有機物循環農法研究会などさまざまな変遷を経て、現在全国６地区５００余名の会員が活動を行っている。現状は第２・第３世代の時代となり、研究会も興味深い内容が多いことから若手農家の入会や参加が増えてきた。弊紙では全国６地区の土を考える会会長に、ご自身の農業経営や各地区での土を考える会の現状と今後について話を伺っている（不定期）。

今回、その第５弾として「中四国土を考える会」の勝部喜政会長（58）に話を伺った。勝部会長は島根県出雲市斐川町の㈱勝部農産の社長だ。

〝従業員ファースト〟を掲げており、月間残業時間は平均15時間で12月から３月まで週休２日を採用。人間ドッグや分煙など職場環境の改善と福利厚生に努め、３年連続健康経営優良法人に指定されるなど働きやすい職場づくりを行っている。

中四国土を考える会　勝部会長

「従業員５人のうち20～40代が４人で定着率は高い。普段から夢を語り、独立して農家になった子たちもいる。ある程度成長したら独立するなど考えた環境整備をしたい。次への旅立ちを後押ししたい」とした。

一方で島根県農業法人協会会長を務めるなど幅広い分野で活躍する。

また勝部農産のある斐川町は、２３００㌶の耕作地を２００３年に農業公社に白紙委任で貸出し土地を再配分。区域ごとに各担い手に割り当てることで面的集約が図られた。

配分された区域は担い手が責任を以て耕作する義務が課されている。その結果、１経営体あたり30㌶が平均面積で、荒廃地は５㌶で土地利用率が高く、土地集積率も85・１％と全国的にも珍しい地域となっている。

特筆すべきは先進技術を全国に先駆けて地域として導入していることだ。８年前には出雲市の補助金でＪＡ斐川町がＲＴＫ基地局を設置。自動操舵はトラクタだけでなくハイクリブーム等にも活用。またレベラーに関しては、それ以前から簡易ＧＰＳで活用されている。勝部農産もスマート農業実証に参画するなど関心度は高いが、流行り出す５～６年前から使用。流行り出す頃には試し終わった製品も多い。

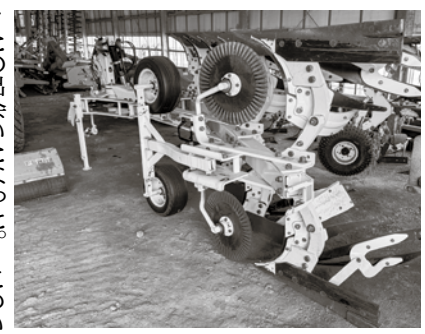
さて営農状況を見ると、作付面積は麦大豆が46㌶で拡大傾向、水稲が面積維持の36㌶の計76㌶で２年３作。また島根県産野菜のあすっこも手掛けている。そうした中で土地利用率は１６０％オーバーと効率的な経営を行う。一枚当たりのほ場面積は46㌃で、効率化や草刈作業負担軽減に向けて合筆を進める。また収穫物は全量系統へ出荷しているが、望まれるもの、高く売れるものを作ることを心掛けている。

先代から作業受託のなごりで周辺の農作業を請負ながら拡大してきた経緯もあり、現在は減少傾向ながら請負作業を継続。逆に乾燥調製は扱い量が増えており米１万袋を請け負っているため、自社農場ではお客さんの作業を優先することから早生と晩生での生産となる。「お客さんの請負作業を優先し適期作業を行うことで信頼関係を高め、先代は受託面積を増やした。その流れが今も続いている。お声がけ頂けるよう心掛けている」そうだ。

さて機械の構成を見るとトラクタはニューホランドやヤンマーのｄｅｌｔａなど１５０馬力を中心に１００馬力以上が３台、60馬力帯３台と50馬力帯２台、33馬力の計10台を所有。乗用６条植ＧＳ田植機や10条田植機、６条刈コンバイン２台と汎用コンバインの他、４条／６条真空播種機や搭載型シーダー、ハイクリブーム、自動操舵２機などを導入している。基本的に主要三機種は新品、使用頻度の低い作業機は中古で導入する。作業機は使ってみて使い勝手や効率、面積や規模感に合わせて機械の良し悪しを判断して良いものだけ残している。

スガノ製品についてはサブソイラ２台、14㌢５連と12㌢５連リバーシブルプラウ、４㍍幅のバーチカルハローと２・５㍍／３㍍／４㍍幅のミックスロータリー、６本爪と８本爪のスタブルカルチ、そして５㍍幅の直装レベラーなど所有する。「いくつか売ったのもあるけどほぼ全て揃っているね」と笑顔。

２０００年にサラリーマンから就農した頃は受託が増えていった時代。40～50馬力トラクタを使っていたが麦豆の転作へ舵切りを検討する中、土壌を乾かすための機械と播種機の導入を検討。大病で引退した先代の助言である「一番大きいのを買うべき」との声で導入したのが１２５馬力トラクタである。それに３㍍のロータリーと５㍍の代かきハローを導入。あわせて弾丸付き３連サブソイラを導入したのがスガノとの出会いとなった。



12インチ５連プラウ

「スピードが出せて効率が良かった。当時購入した超混も時速７～８㌔でほ場を乾かせた。12㌢で５連リバーシブルプラウも水田での深さはちょうどよかった。スタブルカルチも海外製より軽くて１００馬力帯トラクタで水分の多いほ場でも引ける。またゴロゴロを作ってくれるのもよい」と話した。今後の機械導入については作業幅が広めでも２・５㍍幅に折りたためる機械に向かうとしておりそれが一つのギアチェンジになると話した。

ALPEGOミックスロータリーは折りたたみ式。「広幅でも道路走行できるのがいいね」と話す

一方で行政へも働きかける。ほ場条件と耕作環境の整備に向けて、農政会議にも市への要望書を提出。島根県農業法人協会としても日本農業法人協会への政策提言や、県の事情に鑑みた提言も行っている。「文書にしても意思表示しないと不満が無いと思われてしまうので形にすることは非常に重要だ」と強調した。

就農してすぐに先代が入院し、一人で試行錯誤する中で国際農機展や各種勉強会、農場などに足を伸ばし情報をキャッチしながら工夫してきた。胡坐をかかず一歩一歩前進してきた。今後も改良改善を進めていきたいと述べた。

土を考える会

次世代の体制づくりが責務

山陰で乾田直播の実演会を開催

勝部会長は、先代で病床にあった父親の助言を受けながら全国の農業現場を見て回って学ぶことを実践してきた。そうした中で島根県農政連の会長をやっていた折に、岡山県の会長であった夢ファームの奥山孝明さん、嘉数末弘さんらとも交流を持つ中で、両氏に誘われ７～８年前より土を考える会に参加。ＧＰＳ簡易レベラー導入時に香川で行われた土を考える会で熊本県阿蘇市の内田農場さんと営農状況について報告した。

それ以降、活動を通して会員との交流が深まる中で鳥取の田中農場の田中さん親子を初め、さまざまな方から感銘を受けたそうだ。「それぞれに持論があり、凄みがあることから刺激を受けてきた」と話す。その後の役員就任の要請を受けて２０１８年から役員就任。２０２２年に奥山前会長に替わり会長となった。

８月開催の研修会はトゥリーアンドノーフ㊤や田中農場㊦など７カ所の農場を回り乾直ほ場の生育状況などを確認

「現場が見られて、呑みもあるので濃い人の濃い話が聞ける。また事務局メンバーも久しぶりでも覚えていて声掛けしてくれる。会員外でも入会することなく気軽に飛び込めるし、躊躇せず話をできるのがいいね」と話す。

さて「中四国土を考える会」の活動について聞くと冬春と夏秋の研修会が中心となる。今年の３月には愛媛県で『乾田直播の準備～播種体系を探る』とした実演会を開催、太陽農園の視察も行い80人が参加した。その前の岡山開催では昼に70人、夜も40人が参加するなど盛況だったとのこと。気軽さが手伝って仲間を誘いやすいようだ。

また８月２～３日の『乾田直播ほ場弾丸視察ツアーin鳥取・島根』では田中農場やトゥリーアンドノーフ、薮内農場、中北条営農組合、岡農産、じきょう、そして勝部農産を視察。「これだけ軒数を一度で見て回る会ははじめてでテーマを〝乾田直播＋マイコス〟とした。いろいろな条件と品種で比較ができて良かったと好評だった。うちでも干ばつ時の保険としてマイコスにトライしている」と話した。

現在はＳＮＳ効果で若い方の入会が進んでおり、会員外も予想を超えて集まる。４～５人連れ立っての参加も多い。「自ら動かないと情報は得られない。各地に出向き現場で感じるものは大きい。昨年の国際農機展も見に行ったが学びは多い。同時期開催の「北海道土を考える会」で帯広畜産大学の谷先生の土壌に関する講義は土壌分析結果について北海道の会員が熟知していることに驚いた。自分達も学んでいきたいと思った」と話す。このように全国の会が緩やかな形で繋がり相互に行き来するのはいいことだと話す。

今後について聞くと、会員の興味を事務局が吸い上げて協議して決めるとのこと。コロナ前に中断した土壌断面の勉強会を営農に身近な内容にブラッシュアップし、モノリス採取しながら、自分のほ場の特性を知るところから始めたいと話した。